

『平家女護島』 「鬼界ヶ島」の俊寛

大西重孝

〈出典：『文楽人形の芸術』演劇出版社、昭和43年5月〉

昭和十七年五月の文楽座に珍しく『平家女護島』の「鬼界ヶ島の段」が上演された。急場の狂言つき替えのために、種々の点で無理があり、第一には四十何分という時間の制限が、諸所に省略を強いて、大夫にも、人形にもそれぞれの立場で意に満たない点があったことであろうが、今後こうした狂言が出る機会が少ないと思われるので今回はこの俊寛の覚書を試みる。床は織太夫に団六（現綱大夫・弥七）人形はすべて黒衣で、俊寛は栄三、左手は光之助（二世栄三）足は門次である。

手前は青竹の勾欄、上手、下手は岩組の見切り、真中より少し下手寄り奥に小高い岩組の造り物、その前から下手へかけて本物の芦を立て、正面は海原の遠見である。

謡がかり「もとよりこの島は鬼界ヶ島と聞くなれば、鬼ある所にて今生よりの冥途なり、仮令如何なる鬼なりと」でナホシテ「この哀れなどか知らざらん」と切れると、波音を打込んで、千鳥の鳴声と、こだまの鼓をかぶせて、上手奥の岩蔭より、俊寛が、右手に自然木の杖をついて弱弱しい足取りで現われ「この島の鳥獣も鳴くは我を」の間に少し真中の方へ歩を運んで正面となり、杖を前につき左手を添えて、今歩んで来た上手を振り返ってから、さびしげにガックリと首を垂れるのが「……問ふやらん」一杯である。束に立って下手を打眺めてから、静かに船底に降りると、直ぐ「同じ思ひに朽ち果てし」となるが、俊寛は上手へ進んで岩に腰をかけ、左肩に杖をもたせかけて両手をそれに重ねて、面を伏せる。

「岩の懸路を伝ひ下り」で、下手寄りの岩組の蔭から、康頼が現われて立止まり、歩み疲れた態で、膝をなでる。「能くよく見れば平判官康頼」で、俊寛は下手へ振り返って、康頼の姿を認めて、上半身をのり出し「ア、我も人もかくも衰へ果てしか」と、右手をひらいて指差してから正面に身体を戻してジツとなる。「心も騒ぐ浜辺の芦、かき分けかき分け来る人は」で、下手の芦の間から成経が出る。康頼と成経が、俊寛を認めて「こは俊寛か僧都か」と、呼びかけるので、俊寛はグッと身体を起し、右手をのぼして上半身をのり出すようになって、二人を打ち眺め、立ち上って真中に進み、康頼を中に三人が互いに手を取り合って、目をとじて面を伏せるのが「手を取りかはして泣き給ふ」である。

康頼が「三人のともなひもこの頃四人になりたるを僧都は未だ、御存じなきか」と、語るのを両手をひざにおいて聞いていた俊寛は「なに四人になりたるとは」と、キッと身体を起し思わず下手の二人の方へひざを向けて「さてはまた流人ばしあつてのことか」と、腰を浮かして正面向うを見やって、ウレイで首を垂れる。康頼は詞を続けて「イヤ左様ではなし、少将殿こそやさしき海女の恋にむすぼれ、妻を儲け給ひし」と、答える。「僧都にこにこと」でギックリとなり、手をふるわし身体をふるわして、二人の方に向き直り「珍しし珍しし、配所三年が間、人の上にも」と、正面向うを見やり、「……我が上にも、恋といふ字の聞き

始め」と、右手を前に伸して動かし、「笑ひ顔も是初め」と、手を下すと共にウレイで首を垂れる。「俊寛もあづまやといふ女房」と、右手を前に出して、腰を浮かして向うを見やり「……明け暮れ思ひ慕へば、夫婦の中も恋同然」と、手を出したまま二人を顧みて、ジッと腰を下し、「語るも恋、聞くも恋、ア聞きたし聞きたし」と、膝を動かして下手二人の方を向いて「語り給へ」と、右手を出して促す。

成経の恋物語がいくさりあって「即ちあれまで同道、千鳥千鳥」と、立上って、右手をあげて呼ぶ。「檻褸も綾羅錦繡つづれりょうらきんしゅうを」で、千鳥が竹のおうこに、前に水筒、後に目ざし籠をになつて現われ、成経に俊寛を指差されて恥しげに、下手へ逃れようとするのが「なぜに海女とは」で止められて成経、康頼の介添えで肩のものを下し三人の下手へ坐る。

俊寛は「やさしい噂承って感心、康頼は疾く対面とな、俊寛は今日始め。親と頼みたいとや」と、身体を起して優しく揺り動かし「三人は親類同然」と、右手をひらいて二人を指差し「別して今日より親子の約束、我が娘」と、千鳥を見やる。千鳥は「ててエ様よ、娘よとむぞうか者とりんによぎゃアってくれめせ」と、手をついて頼むので「各打笑ひ」で、俊寛も身体を少しく揺って笑うこなしがあつてうなづく。「げに尤もと菊の酒盛、あはびは瑠璃の玉の盃」となり、康頼は目ざし籠からあわび貝をとり出し、水筒の水を酒になぞらえて、まず千鳥に注ぎ、成経にまわし、再び千鳥に戻してから、最後に俊寛にさすのが「汲めども尽きぬ、泉の酒とぞ楽しみける」である。康頼は俊寛から盃を受取って立ち上り、上手を望んで「漁船とも覚えぬ大船漕ぎ来るは心得ず」といぶかる。俊寛は坐ったまま康頼の様子を見上げるが上手へ首をひねって、不安げに両手を前にふり動かし、上手に向き直ると「程よく着岸」で、上手から船が現われる。この間に三人と共に俊寛は杖をついて力なく立ち上り、弱々しい足どりで、少し上手へ退いて坐り、杖を右側におく。

「両使汀にあがって」で瀬尾太郎、丹左衛門の順に船より降りて、上手寄りにつつ立ち「流人丹波の少将、平判官康頼やおはする」と呼ばれるので「丹波の少将是に候、俊寛康頼候」と、康頼と成経とが前に出るのについて、俊寛も一緒に身体をふるわして前に出「はツはツ」とふるえる両手を前に伸ばして二人と同時に平伏する。瀬尾が、首にかけた錦の袋から赦免状を出して読み上げる。成経、康頼のみ赦免とあって俊寛の名が呼ばれない。

「いそぎ帰洛せしむべきの条件くたんの如し」と、読み終わると康頼、成経はひれ伏すけれども、俊寛はギックリと身体を起し、瀬尾の手許を見やって「イヤなう」と、両手を前に出してふるわしながら膝を進め「……俊寛は何とて読み落し給ふぞ」と、両手に膝をつつ張って、ふるえる上半身を前にのり出す。

瀬尾は「読み落せしとは慮外至極、二人の外に名があるか、サ是見よ」と、赦免状を成経、康頼の前に突き出すので、成経は受け取って、真中に戻って、康頼と顔を寄せて読み、俊寛の名が見えぬので「是は不思議」となり「繰返し」で、俊寛へ渡す。俊寛は急いで両手に受け取ってジッと文面を見つめ、ギックリとなり「もしやと礼紙らいしを尋ねても」で赦免状を下におき礼紙をとり上げると「僧都とも……」となり、ここで満身の力を籠めた表現のために栄三のウンという掛声が入ると「……俊寛とも書いたる文字の」とつづき、礼紙を下におき、

再び赦免状をとりあげて両手にひろげて見て（礼紙を下に戻さず、赦免版⁽⁷⁷⁾をとり上げて両手に持って交互に見た日もある）「……あらばこそ、入道殿の物忘れか」と、腰を浮かして正面向うを見やり「……そも筆者の誤りか」と、両手にひろげた赦免状を見下し「同じ罪、同じ配所」と、身体をふるわし「非常も同じ大赦の、二人は赦され」と、成経、康頼を眺め「我ひとり誓の網に漏れ果てし」と、またも赦免状を見下して身体をふるわせて「菩薩の大慈大悲にも」となり、赦免状を下におき「分け隔てのありけるか」と、両手を膝において身体をふるわせ「夙^{とく}に捨^{しや}身^{しん}し」と、右手をひらいて前に出して眺め「死したらば」と、左手を同じく前に出して眺めて身体をふるわせ、両手をひぎに戻してから「この悲しみはあるまじき」と、身体をふるわす。「もしやもしや」と、顔を正面へまわし「ながらへてあさましの命や」と、肱を折って右手を胸に当てて、身もだえして目をとじて面を伏せ「声も惜しまず泣き給ふ」一ぱいに身体をふるわし、さらに目をとじて首を垂れる。

この様を見て丹左衛門は立ち上り、懐中の赦免状をとり出し、小松内府の憐愍^{れんみん}によって、俊寛も備前の国まで帰参すべき条を読み聞かす。「……教経承^つて件の如し」と聞いて、思いがけない歓びに、ちょっと間をおいて、ギックリとなり、身体を起し「何三人ともの御赦しか」となり、「ハアハアハア、ハ、ハ」と、左手を前に挙げてトンと、右膝を後へ引き、逆に右手を前に挙げてトンと左膝を後へ引き「真砂に額をすり入れすり入れ三拝なして嬉し泣き」で、力強く身体をふるわして頭を下げ「少将夫婦、平判官夢ではないか誠か」と、成経と、康頼とを見やり、更に下手の千鳥を顧みて、手真似で歓びのこなし「仏の甘露にうるほいて……」で、合掌して三人と共に平伏す。康頼、成経は安堵の胸を撫で下ろす。

乗船を促されて成経は千鳥の手を取って立ち上り、康頼、俊寛もこれに従って船へ進もうとする。と、瀬尾が真中へ割って出て、「見苦しい女め、見送りの奴ならばそこ立ち去れ」と千鳥を突放す。成経は「婦洛せば同道と堅く申しかはせし女、御兩人の料簡を以って着船の津まで乗せてたべ」と、手を合せて頼むが、瀬尾は聞かず、中啓を振り上げて「やかましい女め、誰かある引ずり退けよ」と、叫ぶと後のツメ人形の雑式がひしめく。成経は両手を膝において「料簡なければ力なし、この上は少将もこの島に止まって都へは帰るまじ、サア俊寛、康頼船に乗られよ」と覚悟の程を見せる。下手の俊寛はギックリと驚き、上半身をのり出して成経を見「いやいや一人残し本意でなし」と、首を振り「流人は一致我々も帰るまじ」と、軽くトントンと正面となり、両手を膝において身体を左に傾け気味に顔をそむけてキツとなるのが「……思ひ定めしその顔色」である。丹左衛門は大赦の道理を説くが、瀬尾はうけがわぬのみか「俊寛が女房は清盛公の御意に背き首討たれた」と、口走る。首を垂れて、ただこの場の成行きに任せていた俊寛も、この思いもうけぬ瀬尾の詞に、両手をひらいて前に突き出してギックリ驚き、ちょっと間をおいて、下手向うを見やるが、その隙も与えず「三人共に船底に押し込み動かすな」と、瀬尾の下知に雑式どもは千鳥を突きやり、成経、康頼を船にのせる。俊寛も手をとられ、身をもがきながら、船中に引かれて行く。丹左衛門も瀬尾の処置に心も進まず、乗船する。

後に千鳥は「鬼界ヶ島には鬼なく、鬼は都にありけるよ……」とクドキがあつて「この岩

に頭を打ちあて打ち砕き、今死ぬる少将様名残り惜しい」と、泣き叫ぶ。「泣く泣く岩根に立ち寄れば」で、船中より俊寛は「やれ待てやれ待て」と、叫びながら現われ、右手を挙げて止めるこなしがあつて、急ぐほど足許は乱れて倒れること二度、ようやく船を下り、千鳥の手を捕えて正面へ出て「コレ船へ乗せて京へやる」と、いいながら千鳥の上手へ坐り「今の聞いたか、我が妻は入道殿の気に違うて」と、右手で指差して腰を浮かして正面向うを見やり、「……斬られしとや」と、ウレイを籠めて力なく手を下し、腰を下ろす。「三世の契りの女房死なせ、何楽しみに我一人京の月花見たうもなし」と面を伏せて、首を振り「二度の歎きを見せんより、我を島へ残し代りにおことが乗ってたべ」と上手の船を見やってから、千鳥を顧みる。「時には関所三人の切手にも相違なく」と、右手をひらいて右からまわすように前に出し「またお使にも誤りなし」と、膝を動かして上手の船を見る。「世に便りなき」と、正面になりながら右手を前に出して眺め、「……俊寛」と、同じく左手を出して眺め、「我を仏になすと思ひ、捨て置いて船に乗れ乗れ」と、右手を動かして促し「泣く泣く手を取りひつ立てひつ立て」で、ためらう千鳥の手をとりトントントンと上手へ押しやり、船に向つて「御両使ひとへに頼み存ずる、この女乗せてたべ」と、辞儀をする。

舷に出た瀬尾が陸に降り立って再び二人の間に割って入り、トンと俊寛を下につき放し「女はとて叶はぬうぬめ乗れ」と、叫ぶ。俊寛は「それはあまり料簡なし、とかくお慈悲」と両手を前へとり合つて頭を下げてから「……瀬尾が差したる腰刀抜いて取つたる稲妻や」で、よろよろと立ち上るが下手後へよろけるので踏み止り、ズズと前に進み、本文通り瀬尾の太刀を引き抜いて左の肩先に斬りつける。「うんとおれどもさすがの瀬尾」で、瀬尾はドウとなり、後向けで、上着を脱ぎかけて差添を抜いて立ち上る。斬つた俊寛も上着を脱いで、下手に倒れ、身体をふるわせて苦しき有様。「打つてかかるもひよろひよろ柳」で、太刀を杖に立ち上ろうとして再び倒れる。「僧都は枯木のみざり松、両方気力渚の砂原」で、兩人ともようやく立ち上り、双方から斬つてかかり左右に交わし「踏込み、踏抜き」で、俊寛は上手へ、瀬尾は下手へ、入り替り、瀬尾が上段に太刀を振りかぶると、俊寛は下に居て太刀を青眼に構えて受け止め「……ここをせんとといども合ふ」でそのまま兩人とも倒れる。

舷に丹左衛門が現われて「御帳面の流人と上使との喧嘩、落居の首尾を見届けて言上する、下人ども助太刀すな」と、戒める。この間に兩人身体を起こし、向い合つて太刀を合すが気力の抜けた態にてそのままトンと同時に腰を下ろし、俊寛は瀬尾の太刀先を押えて肩で苦しき息をつくが「眼もふらず検分す」で立上つて双方から斬り結び、再び上手下手へ入り替り、瀬尾が大上段に差添を振り冠ると、俊寛は下から太刀を突出して受け身となる。下手の千鳥は青竹を振って加勢しようとするので、上から斬りつけて来る瀬尾の足許を払って、後へたじろぐ隙に太刀を突つけた形のまま首を千鳥の方へひねり「寄るな寄るな杖でも出せば相手の中、科は遁れぬ、差出たらば恨むぞ」と、眉を一ぱいに上げてしかる。「瀬尾が心は上見ぬ驚」で、倒れていた瀬尾がよろよろと立ち上るので、俊寛も立ち上り、双方左右から斬つてかかり「雲雀骨にはつたと蹴られ」で、俊寛は瀬尾の太刀をたたき落とし、右足で瀬尾の腰骨をトンと蹴る。瀬尾は頭を手前に仰向けに倒れる。俊寛は匍い上るように馬乗

りとなり、両手に太刀を持って振りかぶり止めを刺そうとする。

丹左衛門は「勝負はきつと見届けた、止め刺す事無用々々」と、止めるので、俊寛は太刀を右手につき「オ、科重^{とが}なつたる」と苦しげに「俊寛、島にそのまま捨て置かれよ」と、身体を後へ反らせるようにして丹左衛門を振り返る。丹左衛門は「御辺を島に残しては、小松殿、能登殿の御情も無足し御意を背く使の落度」と、いう。頭を垂れて聞いていた俊寛は苦しげに身体を起して「さればされば」と、かぶせて「康頼少将に」と、上手船中の二人を顧み「この女を乗すれば」と、下手の千鳥を見やり「……人数にも不足なく、関所の違論なき所」と、丹左衛門を見「小松殿、能登殿の情にて」と、正面向うを見やってから首を下げ「昔の科は赦され帰洛に及ぶ俊寛が、上使を切つたる」と、ふまえた瀬尾を見下し「……科によって改めて今……」と、キッと顔を上げるが、やがてウレイで、首を垂れ「鬼界ヶ島の」と、下手後を淋しげに振り返り、次に上手後を同じく振り返り「……流人となれば」と目をとじて首を垂れ「上御慈悲の筋も立ち、お使の落度」と上手の丹左衛門を見やり「いささかなし」と、面を伏せて首を振り「始終を我が一心に思ひ定めて止めの刀」で、右手の太刀をとり直し、左手を左から大きくまわして瀬尾の咽喉元に添え「瀬尾受け取れ恨みの刀」と、眉を一ぱいに上げて止めを刺す。直ぐトントンと下手へ退いて「三刀四刀肉切る引切る」で、こんどは胴のところを続け様に三度斬り「首……」で、瀬尾の死骸を引ずって後向きとなり太刀を振り冠ってトンと首を落す。「……押し切って」で、左手に瀬尾の切首の髪をつかんで正面となり、トンと右足を踏み出して左足にかかり、太刀を下につき、瀬尾の切首を突き出してきまる。

千鳥は「島の憂き目を人にかけて、のめのめ船に乗られうか皆様さらば」と、駈け出そうとするのを、「ア、待て」と、俊寛は両手で縋り止めてトンと坐らせ「我この^(つ)鳥に止まれば五穀にはなれし餓鬼道に、今現在の修羅道」と、肱を折って右手を胸に当てて首を垂れ「硫黄の燃ゆるは地獄道」と、静かに下手を振り返り「三悪道をこの世で果たし、後生を助けてくれぬか」と、手を合わせて頭を下げ「俊寛が乗るは弘誓^{くき}の船」と左手をまわすように膝におき、右手を同じく膝におき「浮世の船には」と、左手で上手の船を指差して千鳥を顧みて、「望みなし」となり「サア乗ってくれはや乗れ」と、思い余ったように千鳥の方に向つていい、千鳥の身体を抱えるようにして雑式に手渡して船に乗せる。

「せん方波に船人はともづなといて漕ぎ出す」で、俊寛は少し下手へ退いて両手を膝において首を垂れると船上の少将夫婦、康頼が涙を押え、「船よりは扇を上げ」で康頼は扇を開いてかざす。このあたりから波音を聞かせ「陸よりは手を上げて」で、俊寛は静かに右手をかざし節尻で杖を左肩にもたせてジツときまる。杖を力によろやく立ち上り、トントンと前によろけて踏み止り「互に未来で未来でと呼ばはる声も出船に」で、船は上手に漕ぎ隠れる。俊寛は「見送る影も島がくれ」一ぱいに上手横幕へ杖を引いて入る。波音。柁頭^{きがしら}で、道具替り、正面奥の岩組を消す。

本手の奥、波間へ上手から切出しの帆船が下手へ進む「見えつ隠れつ」で、上手から造り物の岩組が押出される。松が一本さびしく立った根方に俊寛は右手を幹にかけ崩れたよう

に俯伏してかすかにふるえている。「思ひ切つても凡夫心」で、両手をふるわせて松の幹へ懸命にとりつき、身体を起して向うをジッと見やり「爪立て、打招き」で右手を上げて三度招き「浜の真砂に伏しまろび」で、岩組から正面へ転げ落ち、身体は傷々しく二つに折れたようになり「こがれても叫びても」で、身体を起し、杖を拾って左肩について力なく立ち上り「哀れと弔らふ人とても」で向うを見やり、弱々しい足取りで下手へ進むと、「泣く音は鷗、天津^{かり}鴈」で、岩組は上手へ引かれ下手から別の岩組が現われる。「誘ふは……」で、よろよるとなるのを杖を力に踏み止り「己が友千鳥」で、岩組に登ろうとして覚つかない足許を踏みしめ踏みしめ、果ては両手をかけて徐々に匍い上り「一人を捨てて沖津波」で、ようやく天辺に登り、両手をついて上半身をのり出して船の行方をジッと見送り「幾重の」が柀頭で、人形遣いの掛声ともろともに足を滑らせて中段に止り観客席には後を見せた片手遣いの形で両足を割ってふんばり、右手を静かにかざして身体をふるわす。帆船は下手へ進む。波音しきりなるうちに幕。

役名	かしら	かつら	備考
俊寛僧都	孔明をやや いらったもの	黒のひっくり	「丞相」かしらを用ゆる事あり
丹波 少将成経	若男	唐毛 すっぽりのひっくり	「源太」を用ゆる事あり
平判官康瀬 ^(てつ)	若男	唐毛 すっぽりのひっくり	「源太」を用ゆる事あり
丹左衛門尉元康	検非違使	油付・切藁・烏帽子付	
瀬尾太郎	大舅	白のひっくり烏帽子付	
海女千鳥	むすめ	唐毛 耳なしのひっくり	